

最近の様子を聞く ラジ・スラーニさんに

ガザから……



巨大な人災の被災地

ガザはますます荒廃してきた。失業率68%、90%以上が貧困ライン以下、85%が食糧支援に頼っている。我々は物乞いを好んでいるのではない。しかしそういう状況を強いられている。高い大学進学率、熟練労働者、ビジネス界にも人材がいるにもかかわらず、占領はガザを大きな人災の被災地にしたのである。我々が直面しているのは飢餓問題ではない。飢えているわけではないが、抑圧や貧困があり、外的発展をガザは妨げられている。

365平方キロに160万を超える人口が住み、世界で最も人口密度の高い場所なのに、住民はガザの外に出ることも、同じパレスチナ自治区のヨルダン川西岸にも行くこともできず、爆発寸前に追いやられている。ガザの市民を守るはずのジュネーブ条約や国際法は機能せず、かえって占領者であるイスラエルの権益を守る、という「カフカの不条理な状況」が起きているのだ。

慢性的な「2020年問題」(注)を抱えるガザをますます困難にしている現在の危機は、援助の減少、イスラエルの軍事攻撃、エジプトから

の締め付けである。

エジプトのクーデター以降の状況はガザを追い詰めている。エジプト軍は「治安的に必要ならばガザ攻撃も辞さない」などと表明し、エジプトを通して国外に出られる人たちは1年前の10分の1になり、エジプトからの物流は98%以上減った。エジプト軍とイスラエルの間には、ガザのハマスとエジプトのイスラム同胞団という「共通の脅威」が存在し、ガザに武器類が流入することを阻止するために6月のクーデター以前からすでに、エジプト軍はイスラエルの同意のもとシナイ半島に大規模展開して国境を固め、トンネルなどを破壊していた。

和平交渉は悲観的

4月後半にイスラエルとの和平交渉が米国の仲介で開かれることになっているが、うまく行くことは期待できない。パレスチナ自治政府のアッバース大統領は米国のケリー國務長官の提案を受け入れられないからだ。イスラエルを「ユダヤ人国家」として認めることはできない。というのもイスラエル国内には100万人近いパレスチナ系市民も存在するからだ。また世界中に散らばる500万人のパレスチナ難民問題を交渉課題から外すこともできない。そしてヨルダン渓谷のユダヤ化の進行を受け入れることもできない。イスラエルはすでに、彼を「不適切、交渉の障害」と言い始めている。アッバースは高齢だし健康状態もよくないこともあるが、彼を排除する動きも出てくるに違いない。彼に変わる人材はいないから、彼が消えると混乱状態になるだろう。その結果、現状は制度化され、将来はますます対立に向かっていく。

軍事攻撃の可能性

パレスチナの「ファタハ」(パレスチナ自治政府、西岸のラマッラーにある)と「ハマス」(ガザ政府)の内部

ガザ在住の弁護士、ラジ・スラーニさんは世界的にも有名な人権擁護の活動家です。昨年「もう一つのノーベル賞」と呼ばれる「ライトライブリフト賞」を受賞しました。日本にも何度か来日し、サラーム読者の皆さんにもおなじみですが、2月末、最近のガザの様子を聞きました。「私はいつも自分を楽観主義者だと思っていたが、最近の状況は悲観的なことしか見当たらない」とスラーニさんは語りました。以下はその抄録です。



対立は、パレスチナ問題の焦点をあやふやにし、国際的な関心を失わせた。シリア内戦などの周辺での大きな事件もあり、ガザに対する国際的な援助は、西側の援助もアラブ諸国の援助も大きく減り、経済状態を困難にしている。今年になって、ファタハとハマスの和解交渉が行われているが、たとえ和解が成立したとしても状況の改善は望めないだろう。

もちろん問題はガザだけでない。同じ占領地である東エルサレムでは街のユダヤ化が進みパレスチナ人の人口は大幅に減少している。ヨルダン川西岸では新たなアパートメント体制が敷かれ、パレスチナ人の街や村は入植地をつなぐ道路で分断され、パレスチナ人は移動の自由も奪われている。

ただガザは、イスラエル占領の実験場に位置付けられていて、我々がどこまで耐えられるのかを試しているのである。ガザ人は強固で復元力が高いとみられているからだ。イスラエルが1年以内にも再びガザを軍事攻撃する可能性は高いと思う。兵士の誘拐とか、ミサイルの発射とかの偶発事件が重なるとそれが引き金になるだろう。



ガザ2020年問題とは：人口増加率の高いガザでは2020年には人口が200万人を超えると予想され、水、土地、エネルギー、インフラなどが人口増に対応できなくなると国連人道問題調整事務所が2012年に悲観的な報告を出している。



ガザは月面基地？

現地で会った日本人技術者の方が「ここには始めてきましたが、まるで月面基地みたいですね」と印象を語ってくれました。ドームに閉じ込められ、限られた水と空気しかなく、外に出ることもできない、地球からは様子は分かるのだけれど何もできない、という状態は確かにガザそっくりです。

そのガザでは経済活動が停滞し、援助が無ければ何もできない状態が作り出さ

れています。その結果、ガザはイスラエルの植民地であるだけでなく、国連など国際援助機関の植民地化しているのではないかと不安を感じました。

私たちも地元NGOやパレスチナ人たちに力を与える支援をしなければ、成果を焦るのではなく地元に着目するような支援をしなければと、ますます思っています。

継続したご支援を お願いいたします。

パレスチナ子どものキャンペーンの支援活動は、皆様に支えられています。

皆様がお長くじっくりと支えてくださったことで、アトファルナろう学校、ナワール児童館、子ども歯科、補習などの事業は地元で根付いた事業になりました。本当にありがとうございます。改めてお礼を申し上げます。

子どもたちが大きくなるのと同じように、支援事業も長期にわたる忍耐強い見守りと励ましがなければ独り立ちすることはできません。特にパレスチナについては外国の占領が続いている、自分たちの国がない、外国での難民生活などのために、普通以上に辛抱強さが求められています。過去決して少なくない国際的な支援がこの地域に入りましたが、早急に結果を求めたり、数年で終わったり、事業をつないでいく地元の行政や団体を育てることができなかった結果、残念ながらうまく行かなかった事業がたくさんあり、いまは国際的な関心が薄れて支援も大幅に減っています。

日本社会も経済の低迷、先行きの不安などのなかで、市民生活も決してのんきではありませんが、まだ世界の他の地域と比べると他者と分け合うことのできる余裕があります。

どこで生まれても子どもたちは「アトファルナII 私たちみんなの子どもたち」という温かい思いと、中東の平和は私たちの生活とつながっているという深い洞察で、これからも支えていただきたいと心からお願ひ申し上げます。